

日本の文化を語る

第6回

神道とキリスト教



デイヴィッド・リード (J.David Reid)

一九二七年十一月二十一日、アメリカに生まれる。東京大学大学院宗教学専攻博士課程単位取得満期退学。現在、聖学院大学教授。専攻、宗教学。主な著書に、New Wine: The Cultural Shaping of Japanese Christianity などがある。

ヤン・スインゲドー (Jan Swynedouw)

一九三五年十一月八日、ベルギーに生まれる。東京大学大学院宗教学宗教学専攻博士課程単位取得満期退学。現在、南山大学教授。専攻、宗教学・比較文化論。主な著書に、『和』と『分』の構造、『日本人の旅』などがある。

司会 上田賢治
阪本是丸

上田 お出でになって早速で恐縮なんですが、先程ちょっとお話が出たんで、私もああそうかと思ったのですが、十年前南山大学で、対話集会の時に、たまたまりード先生もスィンゲード先生も、メンバーでお出になって、私のペーパーをリード先生がコメントをされたことを、やっと思い出しました。私はそのこと全く意識しておりませんでしたけれども。

神道文化会というのは、戦後に神道研究というか、あるいはそれを中心とした日本文化の研究を、神社界で守っているというところで、非常に苦しい状況の中で、司令部、進駐軍の神道政策に対する言論防衛は神社新報で、そして国民に対する文化的な神道の伝統を守る啓蒙、それも学術的なことも含めて神道文化会でやるうという形で作られたものですけど。ですから長い歴史がありますが、最近四、五年、少し事業を増やしたという形で、「神道文化」という雑誌もその一つ、それから『神道文化叢書』とう学術書、ちゃんとしたものを出そうということ、これも少し変わったところ。それまでも五年ごとの記念の時には、非常に立派な、何冊かの明治百年の時の事業とか、非常にいいものを出していましたけれども。

そんなことで、その雑誌のメインに、広い言葉で言えば日本文化、その核になるような、あるいはその部分を代表するような問題を、一つずつ取り上げて座談会というか、あ

るいは私どもがお尋ねして、それに答えていただくような、そういう形でやってきているわけです。去年は「神道と仏教」ということでやりまして、間をおくよりは今度はキリスト教の問題で、あんまり遠慮があつて形式張つたものの言い方しかできない方にお願いと、面白くありませんので、私どもも阪本さんも私も、神道の中では少し逸れたほう、まともじゃないと思われている。自分からは正統中の正統だと思っているんですけども、そういうところもあつて。それはリード先生、スィンゲード先生がそうだとは申し上げません。

(笑) カトリック、プロテスタントを代表する司祭さんであり、神学者でおられるわけで、気楽にお付き合いが長うございますから、遠慮せずに私どももお伺いしたいし、神道についてのことでもフランクにづけづけとお聞きいただいて、阪本さんという優秀な人がおりますから、何でもお答えいたしますから、神道辞典のような人でございますので。(笑)

そんなことで、初めにまだお二人とも、スィンゲード先生は伊勢の神職の講習会とかの集まりに、何回もお出になって話をされたことがありますから、神職の代表的な人はたいいてい知っておられると思いますが、リード先生はむしろ研究者の人が知っていると思えます。そういうこともありますので、恐縮でございますが、自己紹介の形で初めにどういこうとを大学では教えておいでになっているか、一つそこからお

願いたいと思います。

神道との出逢い

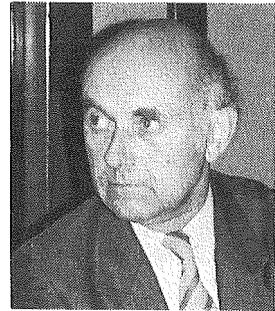
リード 一番難しいです。過去のことではなくていまのことですね。

上田 過去も少しは加えていただいで。

リード 日本に初めて来たのは一九五〇年になります。そしてその時はまだ大学を出たばかりで、三年間日本にいたのです。その後アメリカのメソジスト宣教師として日本にやって来たのは一九五九年になります。ちょっと飛んで東大の大学院に入ったのは確か一九六五年だったと思います。そして柳川啓一先生の下で初めて神道に、少々触れたわけなんです。秩父の夜祭りとか、夏のお祭りとか、あるいは会津若松の祭りに。一緒に行きましたか、その時。

スインゲドー 福島県の田島でしたね。

リード しかし神道との関係は本当に薄いです。あんまり触れる機会はないです。しばらくの間は神道宗教学会に出ましたけれども、それもこの頃出ていません。いまは聖学院大学で教えていますが、担当しているのは宗教学です。私の研究分野というか、特に興味があるのは広く言えば人が持っている宗教というか信仰というか、場合によってはあまり意識することはないのですけれども、それは日常生活においてど



ういう形で現れてくるのか、日常生活にどういった影響を及ぼすのか、そういう方面のことですが。同時に一つの宗教が、別の文化に、一つの社会から別の社会へ移る時の、新しい社会からどういったような文化的な影響を受けるのか。

与えることももちろんあると思いますけど受けることについて興味があって、キリスト教の日本文化から受けている影響について少々勉強してきたわけです。

上田 スインゲドー先生も知られているといっても、一応自己紹介を恐縮ですが。

スインゲドー リード先生とちょっと違って、私は日本に初めて来た時から非常に高い関心を持ちました。どうしてかといいますと、いろんな理由がありますが、カトリック宣教師として日本に初めて来たのは昭和三十六年で、よく覚えております。日本に来た時の最初の日曜日、昭和三十六年十月十五日で、私は姫路におりまして、ちょうど姫路の郊外にある松原神社だと思えますけれども、灘の喧嘩祭りがありました。あそこに連れて行っていただいて、もう最初から神道の祭りに対して非常に親しみを覚えたんです。私はベルギーの



フランドース地方の出身で、あそこは熱心なカトリックの国で、だったといましようかいは。祭りはおそこも非常に盛んで、もちろんカトリックの祭りですが。そして日本に来て最初の日曜日にも祭りに行つて。確かに具体的な象徴は、例えば、裸祭りですから、それはヨーロッパにあまりありませんが、でも祭り気分といましようか、祭りの騒ぎとか、それに対して深い親しみを覚えたんです。

それは直ぐ学問的な関心になつたわけではありませんけれども、日本語の勉強をやつて、そしてそれはリード先生的一年あとだと思ひますけれども、研究生として東大に入つて、その時やはりテーマを選ぶということがありました。最初は日本の新宗教をやるうと思つていたのですが、先生方からそれはよくないと言われて、じゃあやはり神道になつたんです。その時にカトリック教会と神社参拝について研究して、あの

当時はこれはなかなか危ないテーマで、つまりキリスト教のほうから、そういう問題に触れないほうがいいと言われましたが、私はどうしても教会にとつて好ましくないならば、私は喜んでやると、そういうちよつと意地悪い精神を

持っているものですから、(笑) それをやつたんですね。そして一年終わつて入学試験を受けて、その時筆記試験のあとに面接があつたんです。その時に戸田義雄先生がいらっしゃいまして、面接の次の日だったか、戸田先生から電話がありまして、國學院大學へ研究発表にいらしてくださいと言われてるんですよ。私は試験の発表を待たずに受かつたと、それでわかつたんですけれども。(笑) そして恐らくその時初めて上田先生にもお会いできたと思ひますが。

上田 そうですか、記憶がないですが。

スインゲドール もうずいぶん前のことですね。その時カトリックと神道との関係について発表させていたたいたんです。そのあともいろんなことで神道の方に、それから神道の精神といましようか、それに出あつて日本の文化を理解するために神道を知らないとどうにもならないと益々わかつて、別に専門的に神道を研究したわけではありませんけれども、やはり宗教社会学からもっと広く日本の文化というものに関心を持ちました。東大を卒業してから南山に入つて、最初は宗教社会学を教えたのですけれど、いまは主として日本文化概論を教えることになつたんです。つまり日本人に、もちろん日本語で、日本文化概論を教えている変な外人でございます。(笑)

ただ、ご存じのことだと思ひますけれども、日本に来て

う三十三年になりますけれど、二、三年前から私が属しているカトリックの修道会の依頼に応じて、アフリカのカメルーンという国、それからフィリピンにも行って、向こうでも別にこれは神道ではないですけど、異文化間コミュニケーションを教えています。そこで面白いことがあるんです。この間アフリカに行った時にもよく感じたことですが、どうもフィリピンの文化、あるいはアフリカはあまり深く知りませんが、アフリカの文化ですと、日本の文化と非常に共通点が多いというふうに、いま少なくともそういう印象を受けています。これから広い意味での神道文化と、フィリピンの文化とアフリカの文化の比較研究をやりたいと思います。

キリスト教の日本宣教

上田 普通で言えばわれわれもそういうのを語らなければならぬのですが、こちらは司会のほうでございまして、お許しをいただいで。神道とキリスト教の問題を考えるのに、いろんな段階があると思うのですけれども、初めて日本がキリスト教と接したのは織豊時代、ザビエルを初めとする人、カトリックの修道会の人たちと、これが最初で、それからいろんな不幸なこと、ずっと織豊時代から徳川初期まであるわけですが。普通一般、特にその問題を取り上げます時に、キリスト教の受難という形で教科書でもそういうふうな取り上

げ方がずっとされているわけです。その問題、最初のキリスト教の日本との出会いということについて、当然日本にお二人とも宣教のためにみえたわけで、そういう歴史について勉強なされたという言い方は失礼ですけど、いま現在もそういうことを思い出していちいちどうこうということは、キリスト教側の方にもないんだと思います、神道の側から言わせると、そういう問題、何か日本が今度の戦争と同じで、悪いことばかりしたようなそういう受け止め方が、特に戦後そういう教えられ方しているということがあるんですけれど。そのことについていまお二人は、どんなふうにあの時代の問題を理解しておられるのか、あるいはどんなふうに感じておられるのか、簡単に結構ですが聞かせていただけませんか。まずカトリックがみえたわけですから。

スインゲドー いわゆるキリシタン時代ですね。私は二年前長崎に住んで、その時やはりキリシタン時代の子孫たちによく会いました、向こうに教会でも手伝ったことがあります。それは大体三十年前のことですから、あの当時はまだキリシタン時代の信者の子孫には、そういう言葉が正しいかどうかかわかりませんが、やはりまだ一種の迫害コンプレックスがあったんです。今もまだ続いているかもしれないです。でもその迫害コンプレックスというのは、例えば、神道とか日本の仏教とか、それに対して反感を持っているというこ

とよりも、全くディフェンシブなものだと思います。むしろキリシタン時代のことよりも、恐らく明治時代に受けた迫害のほうが、まだ強く残ってたような気がするんです。ご存じだと思いますけれども、一八六五年、慶応元年だと思えますが、いわゆる長崎のキリシタン発見という出来事がありまして、つまりその当時日本に来てたフランスの宣教師はプティジャンという人だったんですけど、大浦に教会を建ててこれはあの時のフランス人の居留地というんですね、つまり外国人の教会があったんです。その時やはりキリシタン時代の子孫の人たちが、教会に行つて自分がクリスチャンであるというふうに打ち明けたんですね。

そしてそのあと、あれは幕府だったか、明治になってからかいま覚えておりませんけれども、確かにまた浦上崩れという迫害が始まったんです。結局自分の遠い先祖たちはずいぶん迫害を受けただけではなく、自分に近い人たちもまたそういう酷い目に遭つたということは、確かに彼らの日本の文化といつていいかわかりませんが、それに対して何か非常にディフェンシブな……。

上田 明治の場合は、日本の政府ですか、それとも……。
スインゲドー 政府です。まだキリスト教は禁止されていませんね、あの時は。

上田 ごく初期ですね、キリシタン禁制のまだあったころ。

スインゲドー 何回も、特に長崎を中心にして、キリシタンたちは追放されたんです。山口県とか、姫路にも追放されて非常に酷い目に遭つたんですね。結局こういう思い出は、あの人たちの中に非常に強いんです。まだ残っていると思うのです。でもいまからこういう時代を見ると、十六、七世紀のことと、明治初期、あるいは幕末の時のあれを見ると、私には判断するのは非常に難しいことだと思います。例えば、最初の時にも、徳川初期の時に迫害があったとか、難しいことですね。特にカトリックの立場から見ると、他の国の例から言うと、どうしてもあの時は十字架と剣ですか、そういう政策は確かにあったんですね。そしてそう簡単にわれわれは正しい、あなたたちは駄目だと、そう簡単に言えないですね。

上田 私は初期の織豊時代のキリスト教と日本との関係で、一番肝心なこと、あまり人が言わないように思うのですが、キリスト教が迫害されたということだけを強調しませんが、信長という人は一生懸命西洋との関係に関心を持って、つながりを持ちたいというようなことで、布教も認めたりしているのですけれど。日本の動乱が戦国時代から織豊時代に、つまり中央集権的にもう一度武家が統一をし直そうという時期で、信長が途中で暗殺されたために、また統一に向かつていたのが、もう一度混乱に陥るといふ。そういう時期の問題で、しかも徳川家康でもそうですが、国内的な真宗教団という非

常に大きな問題を抱えていて、これは戦国時代からそうだけれど、一向一揆というのは戦国大名に真宗教団が武装するという形で、敢然と武士に戦いを挑むという形ですから。それをどうやって押さえ付けるかということに非常に苦労してた。徳川家康なんか自分の家来の中に、一番身近な郎党の中から真宗の信徒がいて、一度命を失いかけてたりしてますから、宗教統制という、宗教を政治権力下に抑え込まなければならんという、そうしなければどうしてもまとめようがないという、そういう大きな政治的動きの中にあつたということですね。

しかもキリスト教が最初に九州地域に入つて、九州というのは昔から、徳川政権時代でも、例えば、薩摩なんているのは独立国のような態度をとっていたわけですし、中央にあまり隷従しないで、自分たちの、そういうことを言う九州の人に叱られるかもしれませんが、私も九州出身ですから、阪本さんも九州出身で、あんまり中央に隷従しないという、そういう姿勢が強かったですね。そういう大名と結び付いているんですね。つまり、もうすでに西洋と接して、アジアの国が隷従する形になって、植民地化されて、日本が独立を守らなければならぬという、これは幕末ですけど。徳川政権の初期というのは、本当に統一をつくろうとする時、豊臣がそれに一番苦労したわけですけど、反抗するという、中

央に従わないという。だからキリスト教を迫害するという、統一を乱すものを抑えなければならぬという、そういう歴史的時期に入ってきてたということですね。

これはあんまり人が言わないから、そういう問題をどうして人が言わないのか。だから徳川政権になると仏教は完全に政権下に抑え込まれるわけです。それ以外の新しい西洋のものが入ってきて、せっかくなまともなものを乱そうとするという、そういう問題があつたと思うのですが。

スインゲドー でもそれは日本文化の特徴と言えるかどうかかわかりませんが、やはり宗教はいつも政治と絡み合つて、何かそこからいろんな問題が出てくると。そのあとずっと同じことだったんですけど、それは特に日本の場合はそうだと考えるかどうかは、私はちょっと疑問ですけどね。非常に強いですねこれは。

リード そういう時代のことを考えると、信仰の自由という概念もなかった時代ですね。宗教と政治と一緒にするのはむしろ当然、政治的な権力を持つてる人なら、当然のこととして宗教もコントロールしようとするわけなんです。これはヨーロッパも日本も同じです。

スインゲドー 同じですね。いまもまだそういう考え方はどっかにあるでしょうね。いま例えば、イスラム世界とか。

リード 例外を別にして、イスラムはそうだ。

上田 それはキリスト教におけるローマ教皇権と、各国の皇帝の帝王権との対立の歴史というのは激しいものですけど。日本の場合は仏教の多くは政権に保護されるといふか、むしろ政権が悪くすれば癒着する形で、その立場をずっと保持してきたのが、鎌倉時代から武家に政権が移って、新しい仏教が出てきて、元寇の役があって、それでまた日蓮宗のような、ともに政権を批判するようなものが出てくるという、そういう形で。しかもこれは平安時代の末にすでに叡山を中心とする天台の勢力なんているのは、大変な勢いであったわけですけども。やっぱりキリスト教が入ってきた時というのは、初期は良かったけれど、直ぐに信長の政変で再び統一の問題が怪しくなった時代という。それに続いてますから、そういう不幸があったのではないかと思うのですが。

明治の時はプロテスタントが初めて入ってくるという形で、しかも先程申し上げたように、日本は西洋との関係で非常に難しい独立を守りながら、近代化していかなければならないという政治目的があった時ですから、それを受け入れるのにいろんな姿勢があり得たと思いますけれども。明治の専門家がいますから、あの時代の明治のキリスト教との関係で、どういふ問題があるのか。私は日本人の初期のクリスチャンというものは、これは宗教史の人だったか、人は忘れましたが、内村鑑三を初めとする新島襄とか、代表的な当時の日本のク

リスチャンというのは、出身がみんな幕府方なんです。つまり維新改革をやるうとした薩長藩閥というか、あるいは勤皇方というか、それじゃなくて新政府に足掛かりを求めて、天下に関わるという立場じゃなくて、朝敵とされた徳川直臣か、あるいは親藩か、東北が多いでしょうけども、それに勤皇軍に対抗する形、攻められた側の出身の人が多いですね。それでいて、これは薩長政府に反抗した自由民権思想を唱えた人たちも、ある意味でそれにちょっと似たような、土佐なんかは最初そういう中心にいなながら、薩長に外されたような形のところから、やっぱり自由民権運動の志士たちが出て来るといふような、政治と絡んだ状況があると思うのですが。

プロテスタントの立場で明治の日本に入っていたその歴史について、どんなふうな回想というか、歴史的意義付けというか、そういうことについてどんなふうに考えておられるでしょうか。

明治期のキリスト教

リード 日本のプロテスタント、一般はどういうふうに考へてるかはわかりませんが。

上田 一番最初に入ってきたのは、メソジストですか。

リード アメリカ聖公会とか、長老教会とか、アメリカ・オランダ改革派教会などが最初だったと思います。

上田 『新訳福音書』を日本語に翻訳したという、それがいわゆる『バイブル』の日本語翻訳の最初だというふうには、これは立教の鈴木さんが発見された、研究して言ってますけど、明治四年だという、それはアメリカの宣教師ですか。

リード そうだったと思います。

上田 プロテスタントの歴史では、日本の明治以降の宣教については、特別トラブルのような、印象に残る事件とか、そういうことは残っていないわけですか。

リード それは残っていると思います。いま考えられるのは二つの点です。一つはスインゲドー先生が指摘した問題に関連してきますけれども、ちょうど十六世紀のカトリックの宣教師が日本にやって来た時と、明治元年との間に、信仰の自由という概念がヨーロッパで生まれたわけです、イギリス、後にフランス、ドイツにも生まれました。近代化に関連して信仰の自由は近代化するための必要条件であるという、そういう願いだったと思います、みんな。そこで浦上事件とか、そういうことに関してプロテスタントの宣教師はカトリックだから関係ないよというような立場でなく、これは信仰に自由ならできるだけ普遍的に、特に近代化しようとする国のためになるものですから、これは強調した、そういう気持ちがあったと思います。しかし、同時にこういう信仰の自由という伝統、ヨーロッパにおいてもわりと歴史の浅いものでした

けれども、日本はなおさらそうだったと思うのです、その当時。その時に日本は、例えば、新しい明治憲法を作った時に「信仰の自由」という一条を入れたと思いますけれども、しかしあれはどうも形式的に響くような条文、そういう印象、そのような印象による、疑問はずうっと残っていると思うのです。

もう一つは、ご存じのようにプロテスタントの場合は明治の最初の数年間は、わりと盛んであったといったら大袈裟かもしれませんがけれども、宣教、あるいは学校、翻訳、いろんな点でわりとスムーズに運ぶことができたと思うのです。しかし日露戦争あたりからでしたか、一八九〇年あたりから雰囲気が変わって、大体その辺から、その時までにはクリスチャンになった日本人は、クリスチャンになること自体が日本と言う国に貢献というのでしょうか、建国運動みたいなもの、新しい日本をつくるために、ためになるとそういう動機があったと、どっかで読んだことがありますけれども、しかし一八九〇年あたりから、どうもクリスチャンが建国のためにはあんまり役に立たない、むしろ邪魔だ、そのような雰囲気になったかと思うのです。そういう意味での問題は、ある程度いまでも続いているかという印象を受けてます。

上田 初期のクリスチャンというのは、案外日本主義者のところがあって。

リード 内村鑑三は特にそうですね。

上田 日本文化のいいところは、ちゃんと主張しなければいけないんだという。内村鑑三なんかアメリカに行って失望して、帰って来ておれは日本人だという気があったんでしょうけれども。それが例の勅語の問題で、少しガタガタして、それ以後内村鑑三問題がいろんな人の研究があるので、私はそんなに読んでいないですから、あんまりよくわかりませんが、内村自身が思っていたことと少し違う形で取り上げられて、苦しめられたというああいう攻め方をしたことがかえって、日本人のクリスチャンを非常にかたくなな方向に向けさせたような感じがしないでもないんですが。阪本さんどうですか、明治のクリスチャンというものをいまから考えてみて、いまのクリスチャンとどう違うなんていう問題もあるかもしれません。

阪本 私そんなに知らないですけども、幕末から明治にかけて神道のことやってますから、必然的にクリスト教の問題が出てきまして、さっきの信仰自由とか、政教分離の問題ですね。私は直接神道とかかわるよりも、むしろ仏教というものの力ですね、これがまずクリスト教と一番ぶつかった。特にもうご承知のように「破邪論」というのは近世からずうっと、仏教が不受不施派とか日蓮宗と、それからクリスト教というものを破邪ということ、邪教というふうにして破邪を

やっていた。

それが明治の始めになって、先程おっしゃいましたように、プロテスタントが日本に一等最初に入ってきて来るのは安政五年ぐらいに、聖公会系のアメリカから宣教師が来るのが、横浜に居留地で来てるのが最初というふうに言われていますが、それはごくそういう軍艦に乗って来た人間とかのための宣教のためで、日本人を宣教するためではないのですけど。幕末になって自由にアメリカ、イギリスからフランスから来て、各居留地、函館だとか横浜であるとか兵庫ですね、神戸であるとか長崎であるとかに居留地がつくられる。そうするとどうしても日本人たちは興味を持ってきて、そうすると集まって来た人に一応しゃべると、それに影響を受ける者が出てくる。ただし、その間にさっきの浦上三番崩れじゃないですけども、幕末に旧幕府の間に見付かった隠れクリシタンが、そのまま処分が明治政府に引き継がれて、どうしようもないものですか、約三千人から四千人ぐらい、山口であるとか、姫路であるとか、高知であるとか、一番こっちはほうは名古屋、あるいは和歌山まで何百人とかの単位で。その間にはいろんな拷問があったり、さまざまなことがあったわけですけども。

そういうことは置いておいても、むしろ私が一番クリスト教との関係では、カトリックよりもやはり近代ではプロテスタ

ントがまず大きい。一つはさつき上田先生がおっしゃいましたように、旧武士、士族ですね、内村鑑三にしても、あるいは熊本バンドにしても、ほとんどが士族、これは当たり前前で、普通の一般庶民にはキリスト教の意義であるとか、そういう倫理的な生き方とか、超越的な概念というものが、やっぱり儒教というものをある程度素養がないと理解出来ないですね。そういう意味で旧士族階級から出てきた。しかし彼等は非常に、例えば、クラークに影響を受けるとかいうことで、ある学校とか、あるいは同志社に入るとか、そういうことで教養主義的な面から入っていくわけですけど、ただ一般庶民には無縁のものであった。

大体一般庶民でキリスト教、プロテスタントに改宗していく、その頃耶蘇教徒と言っていましたけど、耶蘇宗に改宗するのが、東京なんかで大体明治七年、高橋右衛門という下町に住んでたごく普通のおっさんが改宗して、改宗届を出すんですね。ところが当時の日本政府はキリスト教への改宗をまだ認めてないんですね、仏教か神道かどちらかということですよ。六年の高札の撤去というのは、あくまで黙許で、宗教として認めているわけではない。だから要するに宗旨を記載しなければならぬ、キリスト教徒なんというのは書けないわけですよ。だからえらい困りまして、井上毅なんか当時、明治八年ぐらいに何とかキリスト教の対策をしないとどんどん増

えてくる、といっている。特に静岡が多いんですね。さつきおっしゃった旧幕で静岡にみんな幕府の連中が静岡藩というふうにして移封されますから、旧旗本なんか静岡へパーッと行って、静岡で随分出て来る、武士階級で出て来る。それどうしようもないということです。

そういう庶民とか士族階級は別としても、日本の場合は熊本バンド、あるいは同志社、あるいは札幌農学校といった、そういう一つの学校ですね、そこに集う旧士族のインテリたちが、ほとんど後に名前を成す。例えば、柏木義円にしたり植村にしてもそうですし、海老名弾正にしてもそういう士族の出身ですし、そういう士族出身の連中が、キリスト教と初めて接触して、最初は宣教師なんかの、内村鑑三でもそうですけど、真剣に日本のために祈ってくれる宣教師の姿を見て、非常に感動してキリスト教と出会う。それからアメリカへ行ったり、帰って来たりして益々深めていく。それは内村の『余は如何にして基督信徒となりし乎』で詳しく描かれていますけども。そういう一種のエリートといいますか、知識階級が世の動乱期といえますか、変革の時期に自分自身が古い儒教的な教養を持っていて、しかもそれがなかなか通用しない時期が明治維新を境にしてやってきた時に、新しい価値観として自分自身の生き方と、それから国家の行く末といえますか、国家のあり方、この二つをどうするか。これに初期の

というか、少なくとも明治時代ぐらいまでのクリスチャンたちは真剣に悩んだ。いみじくもそれをとことん突き詰めようとしたからこそ、いまでも内村鑑三が盛んに研究されているのは、この「二つのJ」という言い方、これは明治の十年代初めぐらいに言い出すわけですけど。

その「二つのJ」というのを、これは柏木義円にしても、海老名にしても、小崎弘道にしても、真剣に考えた。あるいはもうちょっと時代が下りますけれども、田川大吉郎、明治学院の総理やった。彼は政治家としても衆議院議員やってたわけですから、で、非常に日本の神道にも興味を持っていた。田川大吉郎が明治学院時代に、久米邦武さんの『古代における神道』というものを、明治学院で講演させて本にしたんですけど。久米邦武というのは追放された、『神道は祭天の古俗』を出して帝大を追放された人ですけれども。

そういう意味で明治期のクリスチャンというのは、「二つのJ」に代表されるような、国というのとイエス、キリスト教というものを、これをどう折り合いをつけるか。だからこそ日清、日露戦争、先程リード先生が、日露戦争ぐらいで大体ちょっと、一九〇〇年初めに変わってきたというふうにおっしゃいましたけど、まさに日清、日露というものをどうとらえるか。例えば、植村正久の場合だと、両方の戦争にある程度賛成する。日清には賛成しないけど日露は賛成したとか、

あるいは、日清には賛成したけれど日露にはしないと、いろんなパターンが、幾つかの三つぐらいのパターンがあるのですけれど、それぞれ内村とか植村とかいろいろ人間が違っている。その違いというのはクリスチャンに興味を持っている人間であると同時に、ジャパンというものをどうとらえるかという、その一人一人の国に対する、あるいは天皇と言ってもいいですけど、その距離といいますか、あるいは考え方といいますか、そのせめぎ合いといいますか、それが日本の場合、特にプロテスタントの場合、内村鑑三の無教会主義も含めて、やはり明治時代まではかなり鮮烈に見えてた。

そのあとご承知のように、明治の末年に大体イエズス会が日本に本格的な布教をやって、大正に入ってから上智大学設立ということになるわけですから。だから明治時代と、明治から大正にかけて、またカトリックが力をといますか、本格的な大学の拠点を持って、教区を整備してゆくという。その時にいわゆる旧来の土族出身の、明治維新の初期に洗礼を受けて、国とイエスのことを考えた人たちから、今度はまた違う世代に移っていく。そうして違う世代に移って、違う世代がいよいよこれからキリスト教を布教しよう、あるいはキリスト教的な考え方を広めようとした時に、幸か、まあ不幸だったんでしよう、昭和の初期に入って、益々明治時代よりも統制がきつくなつて、ご承知のように昭和六年の大阪憲兵

隊事件というふうな、伊勢神宮とイエスキリストがどちらが偉いのかというのが、牧師に対して踏絵みたいなのが広がっている。

ですから私は日本に、特に近代の日本にキリスト教が入ってきた、キリスト教が浸透していく過程で、やはり時代をある程度きっちり分けて、明治までのそういうクリスチャン、それからだんだん国家体制が違っていくようになっていく時に出てきた第二世代みたいなクリスチャンになった人たち、それからまさに戦時中のホーリネスとか、灯台社事件みたいな、ああいうまさに戦時体制下でのキリスト教徒の対応というのをきっちりと分けないと、それこそ戸村政博さんみたいにいまの日基督教団の幹部みたいに、戦前における日本のクリスチャンというのは、全部ある意味じゃ戦争協力して、国家主義的なあれを持ってたから、結局罪を犯してしまっただと、で、断罪してしまうという言い方で、すべて明治維新以来、昭和二十年までのキリスト教の歴史を、すべて国家主義に屈服したクリスチャニティ、日本人クリスチャンだったという断罪が、ものすごく多いんですね。

比較的冷静な五野井隆さんという、東大のご存じだと思えますけど、日本のキリスト教史やってる上智出身の人なんですけれども、その方なんかもやっぱり明治以降はすべてそういう目で内村鑑三にもそういう国家主義があったから、結局

利用されてこうなんだというふうな。

上田 少なくとも初期のクリスチャンというのは武士階級出身で、当然庶民と違う国のこと、政治のことというのを、いつも念頭に置いてた。薩長藩閥のやり方が気に食わんということもあったんでしようけど。近代化しなきゃならん、西洋文明と接してどうやっていくかということを、考えていたのだと思うのですが。庶民の一番最初が明治何年ぐらいですか。

阪本 七年ですね。

上田 やっぱり七年ですか。キリスト教は私はあまり日本以外のアジアの国で、どういう形で展開していったか、詳しいことがわかりませんが、日本の場合、外国でも恐らくそうだと思いますが、小学校とか中学校とかじゃなくて、大学を非常に早くバツバツと建てていったという、ミッシェンのですね。それが武家階級だけにとどまらずに、もちろん明治から大正時代の大学なんというのは、相当社会的なクラスからいえば、アッパー・クラスの子弟が入ったんだから、その意味では士族の割合があるいは高いのかもしれないけれども。一般庶民にキリスト教が浸透しているというのは、教会を通じての布教というよりも、学校教育ということの方が相当大きいのではなかったらうかという気がするんですがいかがですか。キリスト教側の目から見て、そういう……。

スイングド― それはもちろん特にプロテスタントの場合です。先のお話ではないですけど、カトリックの場合はやはり長崎を中心にして、そういう古いキリシタンたちに力を入れました。これはもちろん庶民ですね。確かにカトリックもあとで学校をつくったんですけれども。

リード 詳しいことは知らないんですけども、印象としては教会を中心に伝道するのが、むしろあんまりにも当たり前のことで目立たないものです。学校を建てると目立つ。だからそういう意味では、学校中心の伝道みたいなものになるかも知れませんが、事実そうであったか。

上田 阪本さんはどういう評価をしていられますか、一般のクリスチャンが増えてくるといって、一番大きな原因になったものは。

キリスト教の普及と波紋

阪本 明治十年代に入って、先程出ました井上毅なんていう人が一番キリスト教を心配、対策を講じているんですけど、でも、彼が明治十年代の初めには、このままでいくとキリスト教徒がどんどん増えてどうしようもないということ、危機意識を持って新聞なんかも非常に書き立てるんですね。そうするとさっき言いましたように、仏教側がものすごいキリスト教弾劾集会をやりまして、明治十五年ぐらいだったと思

うのですけれども、大阪なんかで講釈師が、松井馬琴というのがキリスト教弾劾の大演説会をやって、その中で五、六百人聴衆がいた中に、七、八人クリスチャンがいて、それと大喧嘩になってしまふということ、五百人のうち七人ですから、どうっていうことはないですけど。

それは一つは『聖書』がさっきお話になった、明治十年過ぎにもう黙許になってしまふんですね、『聖書』の翻訳が。いままで出版条例というので規制してたのですが、それがもう規制できなくなったというので、日本語にどんどん増えてくる。それに合わせて国学者なんかでも青柳高鞆といまして平田派の弟子なんです、それなんか「マタイ伝の誤謬」とか、「邪教鉄槌」というのは、キリストをかなり詳しく『聖書』読んでいて、いちいちこれは違ふとか、歴史的にやっていると、それがちょうど明治十年代なんです。当時で五万人から十万人ぐらいはクリスチャンがいたのではないかと、このまま増えたら大変なことになるといふようなことで、どうやってキリスト教を認可するかと。ある程度の教会の形として人数を制限して、教徒が十万人以上いたら認めようとか、そういうようなことを考えた。

そうするとやはり士族だけではなくて、かなりの部分の普通の一般庶民がやはり入ったと思わざるを得ない。そうすると学校ができますのは、同志社とか明治学院とか行けるのは、

かなりのレベルでないといけないわけですから、そうすると一種の教会といえますか、いろんなとこに建てられたところで、宣教師ないし日本人のクリスチャンが、少なくとも明治の前期まではかなりの説教をしたり、いろんなこと、勉強を教えるなりしながら、影響を与えてクリスチャンの人口を増やしていった。それが本格化するの、学校がどんどんできてきて、いわゆる上流階級にかなりのシンパといえますか、森有礼に代表されるように出て来る。特に東大なんかでカトリックの東大の学生会とか、あるいはYMCAみたいなのができてくる。そこから増えてくるので、十年代までは学校の影響はそんなにはないだろうというふうに私は思います。

上田 私には神学をやっているせいかわるいことにはこだわってまして、『福音書』翻訳の時に、初めて日本語の「神」という言葉で翻訳した。それ以前は「ゼウス」とか「天主」とかという言い方で言っていたものが、日本語の「神」ということで西洋文化が大学の、幸いにしてアジア諸国のように外国語で大学の講義をするのではなくて、わりに日本の場合には早く日本語で大学のレベルの講義をするようになった。それが幸いしたのか災いしたのか、すべて「神」という言葉で言われるということ、日本人の「神」理解は大きな影響を受けたというふうに思っているのですが。

アジアの場合に学校を建てるとか、教会を建てて、宣教す

るということは同じようにやっていると思うのですけれど、キリスト教の「神」を言う時に、その現地の伝道に入った新しい国の言葉でやはり言っているのでしょうか。

スイングドール 中国ですとやはり、カトリックが日本でも使った「天主」ですね。結局カトリックは「神」という言葉を使い始めたのは、終戦後でしょう。

上田 そうですか、ずっと「天主」と言っていましたか。

スイングドール ずっと「天主」だったんです。まだ長崎の天主もあります。終戦ですよそれは、恐らく一九五〇年代じゃないでしょうか。結局中国語で「天主」だから、日本でも「天主」という言葉を使っていたんですね。もちろんキリシタン時代の場合は違うのですが、いろんな問題があったようですね。最初は「大日」だったんですから。

上田 日本人が天主教と言っていた時代は、ごく短いんじゃないでしょうか。

スイングドール でも戦争中はまだ天主教でしょう。

上田 天主教と言っていましたかね。

スイングドール そうですよ。

阪本 戦時中、戦前に、カトリックとプロテスタントと、日本基督教団と日本天主公団というのを二つつくるんです。全部合わせてカトリックを。

スイングドール 天主公教じゃないですか。

上田 フィリピンの場合には英語で。

スインゲドー スペイン語、「ディオス」と言います。

上田 スペインの言語というのは、ダガログ語とか何か、そういうスペインの土地の言葉でもって。

スインゲドー はい、「ディオス」だと思えます。いまフィリピン語でも。

上田 日本の場合非常に早く、これはプロテスタントが「神」という言葉を使ってやったわけですか。

リード そうでしょうね。だから十五年ほど前でしたか、プロテスタント、カトリック両方の新共同訳聖書を作り始めた時には、この「神」などの言葉をどうしましょうかという問題が出たわけです。

上田 それはどういうふうな議論になったんでしょう。

リード それはよく知らない、ただ、プロテスタントの「イエス」にするか、カトリックの「イエズス」にするかなどの議論があったということ。

上田 あれは國學院卒のクリスチャンになった人、関根さん、あの人があれにかかわっているんですか。

阪本 どうなんでしょうかね、関根さんは。

上田 確か関わっているように、関根文之助というんですけど、國學院卒業で新しい訳をするという時にかかわったような気がするんですけど。

明治以後の問題は、戦時中の問題ということになるんですけども、それは私はあんまり身近なところでキリスト教がどうこうということに接したことがないものですから、神戸で盛んに伝道した賀川豊彦、あの人なんかの存在は神戸で育ちましたから知っていますが。教会に行ったことがありますから、救世軍の運動みたいなものはよく接していて、別に何か毛色の変った面白いことを一生懸命やってくるぐらいの印象しかなかったんですけれども。プロテスタントとカトリックの場合と、戦争中のいわゆる制約とか弾圧とかかという言葉で言われるような問題は、程度が違うわけですか。同じように政府の思想統制、布教に対する制約なんていうことがあったんでしょうか。

スインゲドー カトリックの場合はプロテスタントと違って、いわゆる普遍教会、つまりローマのバチカンに本山があるという、そういう外交関係の問題になり得るような側面があったものですから、その点でどうも何か具体的取扱いは、ちょっとちがっていたのではないかなと私はおもうのですけれども。

阪本 上智大学の靖国神社とか、宮城の参拜事件にしても、全部バチカンとのやり取りですから、国との関係ですから。

スインゲドー そうですね、国と国との関係ですから。

リード そしてバチカンのほうからの宣言みたいなものが

あつて。

スイングドール 神社参拝についてですね。

リード 神社参拝の関係で、それは宗教でない限り参加していいというような宣言ですね。プロテスタントにはそういうふう宣言してくれる人物がいなくて、ましてプロテスタントはご存じのようにてんでんばらばらにあるでしょう。保守的であればあるほど。それはちょっと言い過ぎかもしれませんが、せんけれども、例えば、どっちが上なのか、イエスか天皇か、そういうよいな問題になると単純に答える人ですと弾圧にかかりやすい、と聞いたことはあります。

上田 大学紛争のあとに、先生はまだ神学大学にお勤めの時に、若手の学生とか、あるいは若手のクリスチャンがキリスト教団の中心的な人たちを吊り上げたというのは、それは戦争中の反省を求めたんですか。それともそれ以降の。

リード それはあつたと思います。私その時、まだ東京神学大学で、教えてなかったんです。その後でした私が教え始めたのは、ですけれども、そうですね、戦争責任という問題が大きかったんです。

スイングドール いつも出て来るんですね。

リード 協力したから悪いという意味ではなく、むしろ、例えば、一神教でしょうキリスト教は。戦時中の教団の一番トップに立った、名前はちょっと忘れましたが、伊勢に行っ

たそうですね。それは普通のプロテスタントの立場から言えば、これは協力したというより、むしろ信仰の墮落であるというか、そういう批判だと思ふのです。

上田 いまの諸宗教協力とか、そういう観点からいえば、表敬したと言えどもなかったような感じがしますけれども。

リード いまでもプロテスタントの立場から言えば、伊勢に行く、こういう言い方はちょっと気にしないでください。(笑)

上田 信仰上げしからんということですか。

リード そうですね、神様以外のいわゆる神様を崇拝することは、許されないわけなんです。

上田 ピュア・トリビュートという言い方ですまないんですか。

リード ええ、済まないです。

上田 それもいけない。

リード それもいけないです。

上田 カトリックは構わないですか。

スイングドール いや、一概に言えないのですけれども、ただ、カトリックのほうでは特にバチカン公会議以来、先程も話があったんですけれども、前はやはり宗教ではない限り許されるということ、いまは諸宗教対話の時代になって、他

宗教の中にも真理の光線を認める立場から、やはりこれは参拝ではありませんけれども、表敬といいましうか、やっていいんですね。もちろんカトリックとしても自分がそれに、別に考え方を持っているならば、しなくてもよろしいということになっているんですけれど。

リード 複雑です。

スインゲドー そうですね、一緒に伊勢に行ったことあるんですから。やっぱりリード先生の行動と私の行動がちょっと違っていったんですね。(笑)

上田 どう違ったのか、ちょっと教えてください。私その場にいなかったのです。

スインゲドー 私はちゃんと礼をしたわけです。それから拍手打ったんです。

リード 神秘的な雰囲気と美にうたれましたが、私は見学しました。(笑)

上田 そういう違いがあると。

スインゲドー バチカンから時々こういう、諸宗教評議会といえますか。長官がいらっしゃるんですね。やっぱり人によって行動が違うんです、一緒に伊勢とか名古屋の熱田さんに行ったこともあるんです。ある司教、あるいは枢機卿ですと、ちゃんと拍手を打つのですが、ある人はしない、人によって違うんです。どうして違うかというところ、結局のところ、案

内してあげるわれわれがどのような行動をとっているのか、ということによります、本當言うと。(笑)

上田 自ずと現代の問題になっているんですが、これも不躰にお尋ねしますけれども、キリスト教が一番素朴なところから質問させていただくとすれば、信仰を持つことは宣教することだという、それはどうしてなのかということ、日本人にわかるように。それは何も司祭とか牧師に限らずに、特にプロテスタントの場合は万人司祭のような形で、特に伝統的な立場に立つと、神との出会いを持つという、神からの啓示を受ける、召し出しを受けるということを通じて、人に福音を伝えなければならぬという。それはだから信仰行為、伝道ということはある意味で信仰行為そのものであるというような理解でよろしいんですか。

神道がどうして、国際的な、あるいは他宗教の場合に、一方では戦争中にアジアのあちこちに神社を建てたじゃないかという事実を、押し付けのように批判されて、まるで侵略をやったように言われて。それは神道に言わせれば、キリスト教なんか世界中嫌だういうのに押し入って、あちこち教会建てて回ってやってるのに、(笑) 何で神道はそんなこと言われなきゃならないのかという言い方もありますけれども。別個な立場から言うのと、ちょっとも神道は積極的に説こうとしないじゃないか、なぜなんだと、そういう気はあるのかない

のかと。これは南山の時も幡掛正浩先生が、はっきりそういう意思はないと言ったのは記憶しているんですが、キリスト教の場合にそれは、カトリック、プロテスタントとの立場と同時に、スインゲドー先生、リード先生、お二人とも宣教のために日本にみえたわけですが、それはどういう意味なのか、どういう考え方なのか、わかりやすく簡単にお願いできませんか。

スインゲドー これはキリスト教の神学の問題になるんですね。やはりプロテスタントとあまり変わらないと思いますけど、先に言わせてもらいますと、神の普遍的救済意思に協力しなければならぬ。つまり神の意思はすべての人間を救いたいということ、そしてそれがわれわれ信者たちは、やはり神の意思に従って、それと協力して、自分の信仰をできるだけ多くの人たちと分かち合いたい、そういうことではないでしょうか。

リード そうですね、それほど変わらないと思うのです。ただ、一つだけ付け加えると、ご存じのように、例えば、アメリカでしたら九九・九%のクリスチャンが、外国へ行って宣教しようとしません。だからなぜわざわざ別の国へ行って伝道するのかという、そういう問題になるわけなんですけれど、それ一種の使命感と訳したほうがいいでしょうか、そういうことがあります。

上田 それでもあちこちに宣教師を出す時に、どこ国へ行きたいかといって、スインゲドー先生は日本と自分で選んだんですか。

スインゲドー はい、そうです。

上田 その範囲は許されるわけですか。アメリカじゃなくて、日本に行きたいという。

スインゲドー 私は宣教会のメンバーですから神学校時代に選択といいますが、どこに行きたいかということがありまして、私は日本に行きたいと。必ずしも上のほうからどうぞと言わないんですが。私の場合はやはり日本に派遣されたんですけど。どうして日本を選んだかという、ロマンチズムだねこれは。

上田 ヨーロッパにおける、例えば、フランスなんかで代表されるような、芸術関係で日本の室町、江戸時代の文化に刺激を受けて、日本というのはどういう国だという、そういう関心がやっぱりベルギーにもあったということですか。

スインゲドー そうですね。でも私の場合は別にそうでもありませんでしたけれども。

日本のクリスチャンの特異性

上田 問題を切り替えて言いますが、日本に百年以上のキリスト教の明治以降伝道の歴史があって、これは日本

人という一般的な立場から考えても、特に神道の立場からいっても、なぜだろうという疑問としていつもあるのですけれど。人口の比率から言うと、キリスト教徒が、これはヨーロッパでもアメリカでも教会メンバーとしてのクリスチャンは、むしろ、減っているのだという言い方もあるのですが、何も日本だけではないという理解もあるかもしれません、しかしアジアのよその国と比べてみると、極端に日本の場合、キリスト教の立場から言えば伝道効果が上がってないじゃないかという問題。これは阪本さん、日本人の立場でどう考えてるのか、あなたはどう理解しているのか。

阪本 私は日本のクリスチャンというのは、言い古されたことですけど、かなりインテリ層に食い込んでいて、それも単なるインテリじゃなくてオピニオン・リーダーみたいな人がずうっと発言してきたんですね。戦前も戦後もそうですけど。僕は割合小さい頃から好きでして、好きと言うかクリスト教のいろんな本を読むのが好きで、その中でも一番いまでも読んでいるのが、実は大塚久雄さんと隅谷三喜男さんという、代表的なクリスチャンの人のです。これを読んでみますと、これでは日本人たちについてはいけないだろうと。つまり、例えば、今度大塚久雄さんが『社会科学と信仰』という小さい本を出されたんですけど、それなんか読んでみますと、相変わらず日本人というのはいろんなわけのわからない迷信

みたいな信仰して、ちゃんとしたピュアファイされた信仰というのには持ち得ないと、もう如何ともしがたいみたいなことが書いてあるんですね。隅谷さんなんか、東京女子大学の学長とかもされた方ですけども、隅谷さんの読んでみて、あの人の『日本社会とキリスト教』というのを、随分もう二十何年、三十年近く前に出た本なんかでも読んでみますと、ちょうど私が初版が私の生まれる一年前、昭和二十四年、一九四九年に出た本ですが。たまたま昨日高校時代に読んだので出てきたんですけど。それ見ると日本のそういう封建的な制度とか、あるいは古い考え方とか、そんなものがある限りはキリスト教がなかなか入っていけないと、裏返しにして言うと、そういう日本人の古臭い意識とか、生活習慣とか、そんなものがあるから日本人はちゃんと市民社会をつくれな、あるいは個人主義が持ち得ないというような。やはりインテリから庶民に対して、お前らは駄目だ駄目だという言い方がものすごく多いです。

それに対して近頃といいますか、私は何年か前に読んだのでは、慶應の松原秀一というフランス文学やってる人なんですけど、その先生がクリスチャンでして、結局日本の宣教師、あるいは日本に来てる宣教師、あるいは日本の牧師とか神父たちというのは日本人ですね。あまりにもキリスト教が純化されたピュアファイされたものをそのまま持ってきている

のではないかと。もっと、例えば、キリスト教が最初ラテンに入ってから、ゲルマンに入ってから、いまでもサンタクロースであるとか、あるいはクリスマスであるとかを見れば、そういう当初のキリスト教からは信じがたいようなものが現実にはある意味で膨らんで、そういうものを吸収してやってきてると。にもかかわらず日本の場合には、そうではなくてまさに宗教改革があって、ずうっと突き詰めてピュアリファイされたものをそのまま日本人に当てはめて、あなたたちは信仰心が足りない、あるいは考え方が駄目だ、封建的だと、そればかりやってきているのではないかと。もっと一種の意味ではスイングドール先生に近いかもしれないけれど、彼はプロテスタントらしいですけど、もっとそういうキリスト教のドロドロした、歴史的にも、それをもうちょっと日本人にわかりやすくしない限りは、それこそ本当に説教するような形で、あなたたちは駄目だ、こうしなさい、ああしなさいと、こうしなさいけないというような言い方を、やはり日本にキリスト教が本格的に入ってきた明治以降、ずうっといまもやっているのじゃないかと。

上田 明治からその意味ではちょっと変わっていない。
阪本 だから一歩を超えられないんだというようなことを、その松原さんという人は言っているんですけど。そういうことも私はあるのかなと。

上田 一方では、日本のクリスチャンというのは純粹に受け過ぎているために、現実に西洋の国で生きているキリスト教よりも、もっとキリスト教であるという。

スイングドール そうです。

上田 それがあるから駄目なんだと。しかも日本のクリスチャンというのは、それをまともに受け過ぎて、日本のことをあまり本気で考えようとしなない。あるいは、昨日の経験を名前出して言うのと直ぐに差し障りがあるからやめませうけど、何も昨日の経験でなくて、キリスト教の大学関係の人たちとというのは、例えば、仏教のことは結構知ってるようですが、神道のことほとんど知らないという、勉強しようとしなないという感じがありますね。それがどうしてなのか。まず戦後はアメリカ、それ以外ヨーロッパ、特にカトリックなんかの場合にはヨーロッパに行って、向こうで徹底的にキリスト教の勉強をして、帰って来て、その頭で宣教することが基本になってしまっているという。だから日本を理解するというよりも、それこそ心を洗うというか、新しいものと全く入れ替えてしまわないと日本は駄目なんだという考え方を、日本人の司祭とか牧師とかという人は、考えているのではなからうかという、そういう気がするんですが。

スイングドール 日本人のクリスチャンですね。

上田 スイングドールさんはいま阪本さんの言ったような、

むしろ土着のものにちゃんと密着してやらなければならぬという、カトリックがわりにそういう考え方をする人が多いような気がしますけど、それを考えておられるわけでしょう。

スイングドール 私はそう考えておりますね。それで私は日本に来た時に、神道のことを見てすごく親しみを覚えた。でも日本のキリスト教見た時に、何か違和感が湧いてきたという、(笑) ちょっとありましたね。

リード それはあります、私も。

スイングドール ああ、リード先生もそうですか。

リード というのは、これは一般論になりますけど、大抵どの国においても、キリスト教が初めてそこに入っていく時には、最初の一、二世代は、いままでの文化的な伝統と逆流するわけなんです。ですから堅くならなきゃ耐えられないですね。ですから三世代、四世代あたりから、だんだんと普通になるというんでしょうか。(笑) しかしおっしゃる通りだと思います。私も日本のプロテスタントの教会に行く時に、アメリカのプロテスタントの教会とどこか違うといつも感じます。向こうは伝統的にキリスト教徒になる人が多いわけなんですから、かなりリラックスした気持ちで教会に行くわけです。しかし日本ですと何となく堅くて、これ難しい。

上田 ほかのアジアの国に行かれた経験、スイングドールさんは多いと思いますけれども、その場合と、つまりもと

との土着の信仰なり宗教なりとの関係と、日本の場合とで違うということをお感じになりますか。

スイングドール はい。もちろんフィリピンですとカトリックの国ですから、あそこはやはり土着化したカトリックですね。向こうの祭りを見ると、日本の神道の祭りとはそれほど変わらないです。もちろん象徴、シンボルが違うのですけれど、聖人の御興のようなものを担いだり、騒いだりすることで、やっぱり同じことになるんですね。

リード 体に傷を付けることはあまりないね、日本では。

スイングドール それは日本ではあまりないですね。もちろんキリスト教徒がマイノリティーの場合は日本とあまり変わらないかもしれないですね。インドネシアとかシンガポールとか、マイノリティーの場合はやはり自分のアイデンティティーを守るために、周りの文化との相違点をどうしてもよけいに強調する傾向が強い。しかし、先程も先生がおっしゃった問題に帰りたいと思いますけど、宣教、布教の目的ですね、そこにまたいろんな難しい問題出てくるんです。いまクリスチャンというと、数のことを考えれば、確かに日本では効果がなかったということが言えるのですけど、しかし私は上田先生にお会いする時に、上田先生よりは立派なクリスチャンはいないと、(笑) 時々考えるんですね。

上田 私は神道Pですから。(笑)

スイングドールという結局クリスチャンであるということとはいったい何かということになるわけです。ご存じだと思いますけれども、キリスト教の神学の中で、アノニマス・クリスチャン、無名のキリスト教徒という、ちょっと失礼な言い方があるんですけども。いや、私はそれは失礼ということよりも、例えば、上田先生はクリスチャンであると、私はやはり先生のほうから、じゃあスイングドールは立派な氏子だと言われると、喜びますよ。

上田 それで思い出しましたが、ウッダードさんが国際宗教学研究をやった時代に、私に、おまえはアメリカの経験もあるんだし、キリスト教についてどう思ってるか書けと言われて、短い文章ですけど、クリスチャンだと言ってる人は本当のクリスチャンかどうかクリスチャンでない人にもっとクリスチャンらしい人がいると、そういうこと書いたら、ウッダードさんがえらく喜びまして、これは英語でもう一遍書き直せとか言われて、それで向こうの何かに載せたことがあります。それは神道の立場から言って、外国人を見て、この人は日本人よりもっと神道的なところがあるなんていう場合があり得ると思いますけども、私がクリスチャンであるというのとはどうかわかりませんが、私に書いちゃダメです。

一番伸びないという、なぜ日本で伸びなかったかという理由を、どういうふうに考えられるのか、少なくとも信仰告白

をする形で、教会メンバーとなる人間は少ないけれども、文化のあり方とか、日本人のインテリ一般のものの考え方とかいうことでは、もう十分な影響を与えているんだという評価をなさっているのか。私は神道の立場から神学を説いてますと、日本のインテリというのは知らず知らずの間に西洋的な原理の理会で、国際人になることだという形で、キリスト教を中心とする西洋文化、西洋文明というものの発想法でものを考えてるといふ批判を、反省を求めるといふのですが。そういうことを含めた評価を、どんなふうにご自己反省をも含めて、宣教師として来てなぜこんなに効果が上がらないのかということについて、どう考えておられるか。いや、効果は上がっているんだと思っておられるのだとすれば、どういう意味で効果が上がっていると。日本人とはいったい何なんだという。

スイングドール そうするとキリスト教はいったい何だということになるんですね。結局いま先生は、西洋という言葉をお使いになったんですね。

上田 私は古いから、いまだに西洋と言うんですけどね。スイングドール それが大きき問題だと思うのです。やはり西洋文化、それはやはりキリスト教なのかということですが。いまはそうじゃないと思うんですけど、でも本当のキリスト教は何かということになるんです。どの程度までやはりそれ

は西洋文化の土台になってきたか、という問題でしょうね。最近では西洋でも、それに対していろんな反論があるんです。キリスト教はやっぱり、西洋文化を見ると必ずしもキリスト教の精神が浸透したものではない、という考え方がありますからね。

上田 リード先生いかがですか。

リード いきなりマックス・ウェーバーの名前を出すのはあれなんですけど、マックス・ウェーバーの説は私にとってかなり説得力があると見てるわけです。つまり新しい考え、新しい宗教を受け入れる社会層というものは、いったいどこにいるのかという。また逆にどういう人が、そういうような新しい宗教を受け入れられないのか、それについての説明ですと、ウェーバーは確かに、例えば、政治的な責任を負ってる人間はまず受け入れられない。また軍人も受け入れられない。官僚家も受け入れられない。じゃあだれが受け入れるかというと、政治的責任のないインテリ、また大学生、大体そういうような観点から説明しているわけです。日本のキリスト教、特にプロテスタントの経験はどうも大体そのとおりじゃないかなと、見るわけですね。

上田 日本の場合には、政治家、官僚には結構クリスチャンがいるんじゃないですか。

リード 時々はあるんですけども、一般的な傾向として

は。

上田 大体日本で官僚になろうと思うと、国立大学のエリートで、ということはお出身も、家の一般平均から言えば、早くから親、あるいは祖父の代から大学教育のレベルに達しててというような場合が多いですね。そういう人たちというのは明治の雰囲気から、西洋文化に早く接して、それを十分に身につけていてという形で。最近の総理で言えば大平さんがそうだったと言うし、いまの官僚なんか隠れて、あんまり自分では言わないけれども、いるような気がするんですけどね。

阪本さんの知識で、そういうのはどうですか。日本のなぜ、いまの官僚の名前とか何とか、その問題は別個にして結構だけれども、さっき言ったような、日本人のクリスチャンが日本人そのものを少し見下げているというか、ばかにしているというか、確かに神道のことについて聞く時は、日本人でありながら全く知らないことを、別に恥ずかしいとも何とも思っていないという形で、非常に素朴な質問を、あなた日本人かとこっちで聞き返したいような質問を承ることがあるので、それはやっぱり一番大きいですか、民衆に入りにくいという。カトリックの場合にはわりに日本的で、クリスチャンであるという人は、私の接した限りでは多いような気がするんですけど、プロテスタントというとか肩を張ってるというか、身構えてるというか、そういう感じがするんですけどね。

カトリックとプロテスタントの相違

リード 一つは祭りに関連するんじゃないかなと思うのです。

スインゲドー いま全く同じことを考えてました、私は。

リード カトリックですと伝統的に、その文化にある伝統を、できるだけ受け入れようとする姿勢ですね。プロテスタントはどうもピューリタンの影響が強いせいか、祭りがないんですね、寂しいと思う。

スインゲドー カトリックでは毎日フェリア (Feria) というんですね、祭りの日になっているんですよ。

上田 そういうカトリックとプロテスタントの相違というのは、ヨーロッパにおいてイタリアとか、いわゆるラテン系というか、あるいは南ヨーロッパにそういう昔からの、キリスト教以前の伝統があってそうなったということなんじゃないかな。

リード そうですね。聖公会もちょっと中途半端なところがありますが、しかし似て居るわけなんです。イギリスにおいては。

上田 いまの時代、諸宗教会議とか、宗教協力とか、あまり宣教意識をむき出しにするのではなくて、特に第二バチカン公会議以来、カトリックが歴史的な変革を見せて、神学面

でも何か少し説き方を変えてきたという。いま私はスペインからの留学生預かってて、第二バチカン公会議以前のカトリックの神学と、それ以後の神学と、上智大学に行って彼自身がカトリック信者ですから、それをちゃんと神学的に調べてみるということをやっているんですけども、そういう姿勢というのは、世界のグローバル化というか、いちいちそれぞれの宗教の、仏教の言葉では「宗我」と言いますが、自分の信仰に拘泥している時代じゃないという、そういう問題意識があると思うのですけれども。それぞれの信仰の立場を認めながら、一緒に手をつないで行こうじゃないかという、そういう考え方は、キリスト教本来の信仰に立つことは、宣教と関わっているという、神の言葉を伝える使命があるということと、いったいどう関わってくるんでしょう。

神道の場合は、それこそ一つは、戦後は少し逃げた形で、自分たちの伝統文化を守らなければならないという意識のほうが強すぎて、別に人に伝える必要ないんだと、これは日本の文化なんだ、日本人の信仰でいいんだというような考え方が強く出過ぎてると思いますけれども。もし本当に自分の古い伝統の価値を認めるなら、例えば、具体的には最も現実的には、天皇の問題を除けば、普遍化し得る立場にあるんだという。あるいは戦争中には、天皇の問題も含めて世界に広めてもちゃんと通るんだという、そういう考え方をしたたよう

に思いますけど。いまはそういうことをまず積極的には言わないで、神道は神道の立場を守ることが一番大切なことで、ほかの宗教もそういう立場を守ってくれば、何の問題もなしに世界人類のために協力することができるけれども。仏教とかキリスト教とかいう、世界宗教の立場を持つてる人たちは、一方で自らの宗教のより大きな広がり求めて、それが結局人間を救うことにつながるんだからという、それと両立する形で考えておられるわけですね。それは自然に任せるのか、意識してやっておられるのか、そういうことについてはキリスト教の立場でどんなふうを考えておられるんでしょうか。あまり平素そういうことは意識なさらないですか。

リード いや、意識すること大いにあると思うのですよ。

スインゲドー 大いにありますよ、ただね。

リード というのは、はっきりした線を出す意味でしたら、信者が伝道熱心であればある程宗教対話に関して無関心ということになりませぬ。

上田 そうするとそういうことに加わってる人は、あんまり自分の信仰にも熱心じゃないということになるんですか。それは神職でも不思議にそういうことに関わるのは、暇なやつとか、本当に自分のお宮にあんまり熱心じゃないやつだという。それでそういうことにあまり深く立ち入ると、代々世襲で宮司である人はいいけど、そうでない宮司はそのお宮の

ほかの者から邪魔者扱いで、なんでそんなことばっかり熱心にやるんだという、そんなことやるぐらいならお宮の氏子さんとか、あるいは崇敬者たちの、お宮自身のあり方をもっと立派にすることに力を入れないのかという批判があるんですね。それと似たようなものでしょうか。

リード 似ていると思います。例えば、東京神学大学で経験したことです。が、神学校は、牧師を養成するでしょう。牧師を養成する以上、毎週毎週の説教、あるいは伝道集会とか、そういうようなことを前にして養成するわけなんです。諸宗教との対話ということになると、なぜこれに関わるのかというような問題が出てくるわけなんです。その時、それは大体一九八〇年から九〇年まで十一年の間でしたけれど、丁度その頃、世界キリスト協議会は諸宗教のため熱心に動き出しました。しかしその動きがだんだん崩れました。やはりそこにあまり希望を持ってないというような印象を受けた人がふえたと思うのです。私が間違っただけならば、いまのプロテスタントの教会の中では、諸宗教との対話に関して、熱心に考へてる人はわりと少ないと思います。

上田 牧師としての身分を持つている人で、そういうことに深い関心を持って関わるという人は少ないですか。

リード 少ないです。もっと徹底的に言えば、そういうったような人が現れるとちょっと白い目で見られる、そういうこと

ともあります。

上田 カトリックも似たようなものですか。

スインゲドー 似たようなことがあると思いますが、たぶん全体として見るとプロテスタントよりもちょっと熱心かもしれないんですけど。ただ、日本でずっとこういう諸宗教対話に関心を持っているのは、主として外国人の神父で、邦人司祭とか、あるいは一般の信徒ですと、わりに関心が薄いですね。例外はありますが、全体としては特に外人が熱心ですね。その点で、でも先程の話ではありませんけれども、やはり一つの問題としては、宣教の義務とその対話をどういうふうに調和できるかという問題ですね。それについてすごく難しい諸宗教の神学があります。バチカンからも何回もそれについての文章が出てきたんですね、宣教と対話について。

上田 私よりも阪本さんのほうが、現任の神職たちの感覚というか、感じ方は直にピンピン。私は自分が神職の家でもないし、神職の資格も祭式取ってないのですが、阪本さんという問題について、神道の立場で諸宗教対話とか、協力とかいうことに、どういうふうに考えるか、あるいは現神職たちがどういうふうに感じているか、あからさまに言うかどうかということですか。

阪本 問題が限定されての対話ということですね。つまり、例えば、世界平和をどう構築し、それに関してはどんな宗教、

どんな信仰持っていても話し合わなければならぬし、あるいは民族問題であるとか、あるいは食糧の問題であるか、自然環境の問題だとか、そういう問題に関する話し合いというのは、諸宗教がいまの世界宗教平和会議みたいになれる。いまほとんどがその部分です。実際に自分の持つる信仰なり神学なりをぶつけて、実際に例えば、世界平和を構築するにおいては、あなたの考えてる神学とか信仰よりも、私のほうが有効である、あるいは利き目があるというような意味での、それこそある意味ではせめぎ合うような対話というか、そういうものは実際聞いたこともないし見たこともない。実際にはほとんどが世界平和が必要です。環境破壊は駄目です。これは宗教持っていない方が持っているが、ある意味では全人類が考えなければならぬし、考えてることを宗教者がやってると。その部分で私は現実には動いてるところがかなりある。しかし、さっきの宣教ということに関すれば、私はふといます思い出したのですが、葦津珍彦という先生が私によく、政教分離というのはある意味でいえば宗教間の、あるいは教団間の停戦協定なんだと。本来は自分の宗教、自分の持つるものを、全世界に押し広げてやっていく。ところがそれがとことんまでできてしまったがために、例えば、イグノー戦争であるとか、三十年戦争とか、いろんな宗教戦争が起こってしまったと。そういう意味でいったん停止というような形がで

きているんだけど、それがそのままずっと永遠に断続していくのか。そうすると積極的な宣教とか戦闘的な宣教というのは、ある程度控えなければならぬ。それを控えないで昭和三十年代の創価学会みたいに、どんどん折伏やっていると、初めはいいですけどあちこちで軋轢が出てくる。そうするとどうしてもある程度の身を退くというか、一種の停戦ですね。

それがヨーロッパにおいてはまずカトリックとプロテスタントで始まったり、その前はカトリックの前に、カトリックでいろんな宗派間で事実あったわけですけども、それでも銘々がプロテスタントが始まって、即座にジュエスイット教団から、イエズス会から、宗教改革に対する反改革として、東洋とかいろんなところへ、スインゲドー先生の先輩たちが来られてやってきたわけですけども。

私は、ちょっと話がずれるかもしれませんが、先程のことで日本で宣教が成功しなかったか、なぜ百万人前後かということを言われて、それがずうっと気になっておって、これは大事な問題だと思うのですけど。日本の場合やはりほかの外国とか、アフリカとかスペイン、フィリピンとかラテンアメリカと同一視できない。それはなぜかという、もうすでにジュエスイット教団とか、あるいはイエズス会が入って来た時に、かなりの組織化された教団、強固な教団というのが、

仏教を中心にして日本国にはあった。ところがアフリカにしろラテンアメリカにしろフィリピンにしろ、無かったというこの違いというのはものすごい大きいんですね。特に神道もポヤーツとしてますけど、現実には江戸時代を通じてガチツとした一種の組織化されたものを持ってた。そこを抜きにしてアフリカ、あるいは東南アジア、あるいはラテンアメリカに、カトリックないしプロテスタントが行って広がっているのに、日本でなぜ百年たっても広がらなかったというのは、単に数の問題ではなくて、一種のそういう日本人の茫洋としてるみたいですけども、組織としてはものすごい強固なものを。現実にも制度的にも政治的にも持つておった。これは韓国なんかとも違うところです。

そこを視野に入れないと、また他宗教との対話といえますか、日本の場合ある程度、例えば、神道界の人にも、仏教界の人にも、一種の自信みたいなのがかなりあると思うのです。例えば、延暦寺にしたって、神社界にしても、それでそこを置いといて、一応のところみんな利害が差し障りのないところの世界宗教、平和であるとか、環境問題であるとかで対話しよう。しかし実際にそうではなくて、例えば、スインゲドー先生なりリード先生がそうではなくて、もっと積極的に、あるいは戦闘的に、いや、あんなの言っていることは間違っている、この信仰間違っているんだというようなことで、パーッ

と来られると、恐らくいままでのような宗教対話とかいうものは成立しないですね。(笑) また停戦協定が破られる、そのところに神社界の人とか仏教界の人が、本当にどれだけ気がついてるのだろうか。私はそういう意味で一般の神主さんが、あの人は好きだからやってるんだという言い方をする背景には、そんなことをするならば、むしろ積極的にうちの神社をどんどんよくしていったほうがいいじゃないかと。だから冷ややかな目で見てる人が、中にはいるでしょうね。それは悪いとは言いませんが、宗教対話をするのは、しかし、その宗教対話と言われるものが、一種の利害のないところで一種の馴れ合いみたいな形でやられてる以上は、私みたいなある時には神道Pになる人間にとっては、とても耐えられない生温い。

例えば、スインゲドー先生とかリード先生とかだと、こういう話ができますが、私が上智の門脇先生とお話する時には、私はやっぱりむきになります。もうあきらかに神道というのは下等な宗教で、神道を勉強する学者なんていうものは、論理構造が全然なっていない、全然組織だった話ができないと、まともに私なんか言われるわけです。それに対して私の知ってる学者は、神道の学者はみんなばっかりだみたいな言い方をされるわけです。(笑) そうすると、そういう時には私らはバツとやらなければいけないけど。しかし実際に神

社界の人が、世界宗教平和会議で言ってる時には言われないでしょう、あんたがこんなことやって、お祓いなんかしてるのは原始的でアニミズムに毛が生えたものだ、ばかみたくないものだなんて言わないですよ。しかし私は本来は、スインゲドー先生でもリード先生でも、あるいはほかの人でも、私の宗教信仰、あるいは神学から言えばこんなものは原始的だ、こんなものは迷信だということをやっぱり言わない限りは、私はこれは本当の意味での宗教の対話といえますか、にはなり得ないと。そこを避けて……。

上田 だけど、その問題は確かにあるけれど、私なんかある程度嫌われるような形でキリスト教の人が言ったこと、仏教の人が言ったことに、食って掛かるという言葉は適切ではないけれど、ズケーツと反対のことを言ったりするんですけど。

阪本 先生だけやっぱり特殊なんですよ。

上田 いや、それはリード先生にしてもスインゲドー先生にしても、そんなにご自分で意識していられるかどうか、一言ずついただきたいと思うのですけれども、少し日本に親しみ過ぎて、今阪本さんが言ったように、神道のやってることが未開な宗教のやってるような、極めてマジカルな儀礼にすぎないというのではなくて、長い伝統の中で内容的に豊かな文化性を持っているんだという、同情的理解といえますか、

そういうものがいつの間にかできていて、最初からかつての、あるいはいまの日本のクリスチャンの、日本人クリスチャンのようなインテリ・クリスチャンのような、自分らの内側から理解しようとする態度はあまり持っていない人と比べると、逆にならずと日本的なものを好意的に理解するという立場に、なっておられるということがあるんじゃないですか。その点、いまでもなお宣教師としてのお立ち場は変わってないはずで、クリスチャンで、いまの日本人、あるいは日本についてそんなこと結論的に二分や三分で言えるかと、お断りになられれば、もうそれで終いですけれど、何かこれは言っておきたいということをお一言ずつ。

スィングドール いま先生がなさった質問の答えにならないと思いますけれど、私は神道を見たらマジカルとか原始的なもの、それからもっと深いものがあると、そういう区別をする必要があるかどうかと、私は思うのです。というところ、私は最近原始的という言葉はすごく好きになっていっています。

上田 プリミティブという言葉の本来の意味。

スィングドール 本来の意味ですね、つまり人間性に近いという意味での原始的なものは。

それは神道の中に確かにある。そして私自身のキリスト教カトリックの伝統を振り返ってみると、その根底にもやはり同じような原始的なものがあると。そして初めて日本に来て

から神道に対して親しみを覚え始めた時からいままで、やはり根底に流れている原始性は、人間にとって非常に大切な宝ではないかなと私は思っておりますので、そういう意味でもこれからも神道とキリスト教の関係、そのために貢献したいと思えます。

上田 どうもありがとうございます。リード先生一言。おべんちゃらを言うていただく必要はないんで。

リード いいえ、あまりにもスィングドール先生が言われたことに賛成してるもので、何が付け加えられるかという問題なんです。ただ、原始的というのはどういう意味なのかという問題になるかと思うのですが、私も時々世界宗教について講義する時に。あえて世界宗教一つ一つについて講義するよりも、学生にそれを読ませて、私はいわゆる原始宗教に絞って一学期講義するわけです。それは原始宗教の特徴は、私の勝手な解釈かもしれませんが、人間の全存在に関わってくる、そういう意味での「原始」になるかなと思うのです。もしそういう意味でしたら、私も非常に大切な宝だと思うのです。そういう意味ではキリスト教も原始宗教だと思います。

ただ、阪本先生がおっしゃったことですね、意見が合わない時、あるいはただそれが迷信だと思う時に、どうしてはつきり言わないのか。それも日本文化と関係があると、私は思うのですが。(笑) つまり場に関連してくるわけです、公の

場というか、あるいはあたかもある団体の代表として出てくる時は、そう簡単に討論することができません。むしろ衝突を何とかして避けたい気持ちになりやすいです。しかし、実際の討論というか、意見のぶつかり合い、それは非常に望ましいとは思いますが、それは、例えば今日みたいな場面ではなく、むしろビールを飲みに行った時にできるんじゃないかなと思います。(笑)

上田 どうもありがとうございました。時間になりました。まだ伺いたいようなこともあります、また機会がありましたら。どうも長時間ありがとうございました。

(了)

